

# 石川淳「今はむかし」論

——再編される歴史——

吉田拓也

はじめに

石川淳の「今はむかし」は、一九五八年四月二八日に『別冊文芸春秋』に発表された短編小説である。本稿では、「今はむかし」に開陳される登場人物の歴史観や、〈今〉と〈むかし〉の関係性を明らかにすることで、「今はむかし」が、石川の歴史に関する作品を考察するうえで重要な位置にあることを指摘する。

まず、梗概を確認する。主人公の歴史家・余一は、中学校のころの教師であった老先生の告別式に行った。そこで中学で同級生であった小説家と再会する。式を抜け出した後、余一と小説家は、老先生や余一の歴史観、「今はむかし」という言葉について論じ合う。その後、余一は予定したロカビリーに行く。

余一は、ロカビリーから帰った後、小説家と電話で会話をし、再び「今はむかし」について論争を交わした後、電話を一方的に切ったのだった。以上が梗概となる。

先行研究において「今はむかし」は、主としてその直前に書かれた「八幡縁起」と直後に書かれた「修羅」をつなぐ小品として理解されてきた。青柳達雄<sup>(1)</sup>、井澤義男<sup>(2)</sup>、安藤始<sup>(3)</sup>、藤原耕作<sup>(4)</sup>の諸氏の「今はむかし」に対する言及は、すべて「修羅」論あるいは「八幡縁起」論においてのものであった。そして、全員に共通するのが、余一の「日本の歴史は室町から書き出せばいい」といふ意見と「それ以前には、伝説の分布はある」という意見からなる歴史観を紹介し、それを、古代から鎌倉までを舞台とする「八幡縁起」と、応仁の乱を舞台とする「修羅」の時代設定と照らし合わせるという言及の仕方であった。

唯一、「今はむかし」それ自体を対象として論じたのが、畦地芳弘氏の「今はむかし」における現在<sup>(5)</sup>である。だが、ここでも「八幡縁起」と「修羅」との関連のほか、テキストにおけるいくつかの論点に軽く触れるだけにとどまっている。

「今はむかし」を「八幡縁起」と「修羅」をつなぐ作品として位置づけることは、もちろん妥当ではある。だが、「今はむかし」を単なるつなぎとして捉えるだけでは、テキストそのものを軽視することにはならないだろうか。つまり、余一の歴史観を、「八幡縁起」や「修羅」の「前書き」<sup>(6)</sup>としてではなく、「今はむかし」というテキストにおけるものとして分析することはできないか、ということである。

それに加えて、テキストの〈今〉と〈むかし〉の関係を分析することで、石川の歴史を取り扱った作品との関連性を見出すことができまいだろうか。

そこで本論では、第一節、第二節で、老先生と余一の歴史観を分析し、余一の歴史観が老先生のそれを「再編する」歴史観であったことを指摘する。また、第三節では、余一、老先生、小説家の〈今〉と〈むかし〉の関係性について考察し、なかでも余一の〈今〉と〈むかし〉の関係性が、歴史記述という面において重要なものであることを論じる。そして最後に、石川の

他作品に見出せる歴史の「再編」と〈今〉と〈むかし〉について言及する。

なお、本稿は、『石川淳全集 第六卷』（筑摩書房・一九八九年一〇月二五日）所収の「今はむかし」を本文テキストとし、引用に際して漢字の旧字は新字に改めた。また、引用の傍線は筆者によるものである。

### 一、老先生の歴史観

本節では、老先生の歴史観を分析する。それは、一九一〇年代における時代思潮の影響を受けているものであり、いわば「歴史の組み換え」とも呼べるものであった。

老先生の歴史観を理解する手がかりとなるのは、次に引用する余一のセリフである。

「(略) 老先生は一生かかつて国史の……それも専門は古代史、下つては鎌倉までだが、解説ばかりを書きつけて来られた。ただその解説したもの、御本人が解説したおつもりであつたものは、いつたいなにかといふと……」

(中略)

「老先生は大学教授としても、本の著者としても、その学問は旧に依つて本質的には中学校の講義の延長だつた。つまり、何といふこともなく、すでに一般に国史上の眞実とおもひこまされてゐることを、老先生はきはめて無邪氣に、それこそ眞実に相違ないと、検定済の判コをおしつづけられた。どこの馬の骨が書いたとも知れぬあやしげな歴史小説を、たしかな傑作だといつて保証したやうなものだ。そして、枝葉の部分については、ときどきここがいけないといつて指摘することをわすれない。さすがに知識の手がこんであるやうに見えるところは、今日の制度がよろこぶところの検定済の老大家といふものだらう。」

ここで注目したいのは、以下の三点である。一つ目は、先生の専門が古代史から下つても鎌倉までであること。二つ目は、老先生の学問が本質的には旧態依然であり中学校の講義の延長であるとされていること。そして三つ目は、一般に思い込まされている「国史上の眞実」をまさしく眞実として検定済とした、とされていることである。

老先生の専門が古代から鎌倉時代までであるということには、室町時代以後から歴史を書き始めようとする余一と区別す

ることに加え、老先生が中学生を指導していた時期が関係していると考えられる。では、老先生が中学校で講義していたのはいつごろであり、またその時期にはどのような影響の下で講義が行なわれていたと推測されるのだろうか。

まず、老先生が中学校の教師であつた時期について考察する。小説家のセリフによれば、老先生は「大学を出たばかり」のころに、中学生である余一と小説家に講義をしている。テキストにおける時代設定は発表年時と同じく、ロカビリーが流行し、「大きな興行」つまり第一回ウエスタン・カーニバルのあつた一九五八年であると考えられる。そう仮定し、六〇歳を停年とすると、「停年を来年にひかへた」余一は一九五九年に停年を迎えるはずである。その年齢を仮に五九歳とすれば、中学生であつた期間は四一年から四六年前の一三歳から一八歳と推測される。西暦でいえば一九一三年から一九一八年の間となる。また、この時老先生は二五歳ごろであると考えられる。

では、当時の老先生の講義はどのような影響下にあつたと考えられるのか。一九一〇年代の中等教育の歴史科目に目を向けると、それは国体史観に基づいたものであつたといえる。坂本太郎氏は『日本の修史と史学』<sup>7)</sup>で次のように述べている。

もともと明治政府は、日本史の教育をもって国民教育の重要な要素とし、これに国体観念の確立、国民思想涵養の任務を負わせた。従ってその大目的にそう史実を強調し、それに反する史実をかくす傾きがあった。学者は、これを「応用史学」といい、純正史学と応用史学とはおのずから別であるとして、学的良心を納得させた。たとえば『日本書紀』の紀年の不正確は那珂博士以来学会の認める所であるが、初等中等の教育では神武紀元を正しいもののように教えたのである。この処置は、明治から大正をへ、昭和の初め頃まで、難なく行われた。

実際、一九〇一年の中学校令施行規則第五條には、「歴史ハ歴史上重要ナル事跡ヲ知ラシメ社会ノ変遷、邦国、盛衰ノ由ル所ヲ理會セシメ特ニ我国ノ發達ヲ詳ニシ国体ノ特異ナル所以ヲ明ニスルヲ以テ要旨トス」とあり、一九〇四年に歴史の教科書は国定となった。国体史観の特質としては、田中史郎氏が『社会科の史的探求』<sup>9</sup>において、国体を歴史的事実として善美であると認識することや、国民的倫理と善美なる国体の歴史認識との結びつきなどを挙げている。

また、先に引用した『日本の修史と史学』で述べられる「応

用史学」と「純正史学」についても考えておきたい。坪井九馬三は一八九四年に「史学に就て」<sup>10</sup>において、「德育」のための「応用史学」と近代史学の方法を用いた「純正史学」とを分類した。廣木尚氏によれば<sup>11</sup>、これらは歴史学界と、歴史教育を含む一般社会との棲み分けのための理論である。続けて廣木氏は「教科書の国定化によって「応用史学」の市場に「純正史学」が流入する回路が作られたことが両者の摩擦を準備した」と述べる。つまり、「学的良心を納得させ」るためのものであった「応用史学」と「純正史学」の棲み分けは、国定教科書という政治の介入によって崩れていくのである。

このことが顕著にあらわれたのが、一九一一年の南北朝正閏問題と国定教科書の編修官であった喜田貞吉の休職である。先の田中氏は、喜田が「一方では倫理的な国体史観に立ちながら、他方では、純正史学を歴史研究のみでなく、歴史教育においてもとりこみ、その調和をはかろうとしたとする。ここでいう「国体史観」は「応用史学」に繋がる史観であるといえる。喜田は坪井が分かつべきものであるとした両者を教科書編修において使い分けようとしたのであった。廣木氏は、

「応用史学」と「純正史学」とは目的も方法も異にする別

物である。しかし、その違いさえわかまえていれば、同じ人物が両者を使い分けることは可能である。そう論じることで喜田は、坪井が市場も担い手も異なるものと把握した「応用史学」と「純正史学」を、担い手を同じくしても成立しうる方法的差異として再解釈し、「純正史学」の側自身を置きながら「応用史学」である教科書を作成するといふ自己の立場を正当化したのである。

と述べている。<sup>15)</sup>

だが、結局は田中氏のいうように、「史実に基づいて歴史を考察しようとする場合に、国体史観との間に矛盾を生じざるを得ないことを、喜田も認識せざるをえなかった<sup>16)</sup>」。そのため、喜田は矛盾を「解釈」や「例外」として処理することで克服しようとしたのである。

しかし、南北朝正閏問題は単なる「例外」として処理できない史実であった。喜田はそれに対して「歴史上の一時の変態である」とする「変態論」を唱えるも、帝国議会で問題化し教科書は改訂となり、喜田は休職となった。

では、老先生はどうだったのだろうか。このような一九一〇年代の歴史教育の動向との関係性を鑑みれば、中学校に勤めて

いた老先生もその影響下にあったであろうことは想像に難くない。国定教科書を用い、「国体ノ特異ナル所以ヲ明ニスル」ための授業を行なっていたと考えられる。

しかしながら、古代から鎌倉までを専門とする老先生は、南北朝正閏問題という矛盾とはぶつからなかった。古代から鎌倉までという研究対象は、余一の室町以後の歴史との対比というだけではなく、老先生が国史上の大きな矛盾にぶつからないために設定されたのではないだろうか。

だからこそ、老先生は「旧に依つ」た中学校の講義の延長としての「学問」をすることができたのではないか。言いかえれば、前述の設定に因ることで老先生は「応用史学」的な一面を維持することができたということである。そしてその具体的な内容こそが、一般に「国史上の真実」と思い込まれていることをまさしく真実であると「無邪気」に「検定済の判コ」を押しつづけることであった。これはつまり、中学校令や国定教科書に基づく国体史観を採択した「国史」こそが真実であるとして、専門家のお墨付きを与えたということである。

また、老先生は、「検定済の判コ」を押しながらも、「枝葉の部分については、ときどきここがいけないといつて指摘することとをわすれない」。これは、老先生の「純正史学」的な一面で

あるといえるだろう。つまり、鎌倉までを専門とし、南北朝正  
間問題にぶつからないことで、これらの「応用史学」と「純正  
史学」が摩擦を起こすこともなかったのである。

このように、一九一〇年代の歴史教育の問題の影響下にあつた  
老先生の歴史観は、「純正史学」的な一面を持ちつつも、国  
体史観に基づいた「応用史学」的な中学校での講義の延長であつた。  
もちろん、戦後も国体史観に基づいた著述をしていたとは  
考えづらいが、少なくとも一般化した史実を疑わずに追認する  
歴史観を持つ人物であつたといえるだろう。

## 二、余一の歴史観

本節では、前節で分析した老先生の国体史観的な面を持つ歴  
史観を、余一の歴史観が再組み換えするということを指摘する。  
また、畦地氏の先行論で指摘されている、「万世一系の皇統を  
排斥した」人物としての尊氏を、老先生の歴史観と石川の言説  
を踏まえることで敷衍して論じる。さらに、余一の歴史観が同  
時代の影響を受けているであろうことを指摘したい。

余一の歴史観は、「ぼくの仕事は室町からはじめるよ」と述  
べていたり、小説家の「きみはかねて日本の歴史は室町から書

き出せばいいといふ意見のやうだつたが、今でもさうか」とい  
う質問に「さうおもふね」と答えていたりすることから、室町  
以後を対象としたものであることがわかる。そしてその説明と  
して次の引用部のセリフがある。

「それ以前はどうなる。」

「それ以前には、伝説の分布はある。しかし、血のかよつ  
た人間がかたまつてうごき出したといふことでは、室町は  
近代のひらけはじめだよ。後世の生活にまで血がつながつ  
てゐるやうだ。その室町のとつつきに、尊氏といふ弱虫の  
英雄があるね。こいつほど非力で売りこんだ大看板の役者  
はゐない。その身に於てあるかなさかの悲しいやつだから、  
この役者は実在したにちがひない。日本の神話といふキツ  
ネの尻尾は最後に弱虫の英雄を打ち出したばかりにぶつ  
り切れたと、ぼくは見る。(下略)」

まず、余一は、室町より前の時代については、「伝説」や「神  
話」であるとしている。対して室町時代については、「血のか  
よつた人間」が動き出した「近代のひらけはじめ」であり、「後  
世の生活にまで血がつながつてゐる」としている。この室町以

前／以後の隔たりは、つまるところ「神話」や「伝説」などの非人間的、非実在的な要素が残存しているのが室町より前の時代であり、「人間」の歴史が始まって「近代」と地続きであるのが室町以後であるということだと考えられる。

そして、より注目したいのが、その境に「人間」として「打ち出された」のが足利尊氏であると、余一が述べていることである。ここでは、尊氏は存在として「あるかなさか」であるために「実在」する、という逆説によって、実際に「人間」として存在したのだとされている。これは、尊氏が「神話」や「伝説」的な人を超えた存在として語られることのない「弱虫の英雄」であると思われているからこそ、まさに生身の「血のかよ」う人間らしくある、ということであると推される。

また、尊氏が現れることで「神話」が「ぶつ切り切れ」、「人間」の歴史が始まったという余一の見方は、前節で見たような、老先生が中学校で教授していた国体史観やその延長である皇国史観とは対照的な歴史観であるといえるだろう。なぜなら、周知の通り皇国史観は、万世一系の天皇を基軸とし、『日本書紀』『古事記』の神話的記述をも歴史的事実とすることで「神話」と「人間」との歴史の間を地続きであるとしているからである。余一はそれに対するように、神と人間とが分かれる時点の「とつつ

き」として、北朝を立てて後醍醐天皇を吉野に追いやり、南北朝正閏問題の火種となつて「逆賊」とされた尊氏を置いているのである。逆にいえば、万世一系の歴史観を分断する尊氏という存在が現れるからこそ、余一は室町から歴史を説き起こそうとしているともいえるのではないか。

このような尊氏への関心という点において、余一の歴史観は石川の言説に繋がるところがある。石川は、一九四九年の「雑談」<sup>15</sup>において、次のように尊氏を評価している。

日本の政治家では足利尊氏がいちばん偉いね。大政治家だ。信長より偉い。軽率でね。すぐ死にたくなる。敗けて、河を渡つたりして、もう駄目だ、切腹しようと思ふ。ほとんど詩人的素質なんだが、生きのびると大政治家になつて、大きな手をうつつてゐる。人間性のいいところがある。

そのほかにも、一九四四年に発表された『義貞記』が一九六二年の全集に収録された際の、作品末に添えられた「附記」<sup>16</sup>に、尊氏に関する言及がある。「附記」は、「この一篇はわたしの戦中に於ける舞文曲筆であつた」という一文ではじまり、尊氏に関しては次のようにある。

われわれは書けといはれても書くものに窮した。目のまへの今が書けないとすると、いきほひ遠いむかしにおもむく仕儀となる。そのむかしのことでも、げんにこの本のことにしてまづ後醍醐天皇は出しにくい。もしこの尊厳侵すべからざるものの名を無用の小説本の題号に使つたとしたらば、それだけでもつい不敬にあたる。それでは尊氏はどうか。とんでもない。きはめつきの「逆賊」の名を売りひろめるものはまた逆賊のかたわれではないか。(略)無芸無能の義貞あたりならばまあまあとといふことになる。すでに書くとすれば、このぼんくら大将を主役に仕立てるほかない。(略)わたしのひいき役者の尊氏はどうしても日陰に追ひこまれる。源氏の系譜からいつても、本家の尊氏が分家あつかひ、分家の義貞が本家なみに昇格する。義貞なんぞはとても本家の棟梁と肩をならべるほどの役者ではなかつた。(略)そして、南北いづれを宗として立てるかといへば、このところいやでも規格版の南朝方。これは事情やむをえない。内容またしたがつて然り。

要するに、石川は戦中の出版統制の影響で尊氏の伝記を断念

し、やむをえず義貞を主役とした作品を書いたということである。そして『義貞記』は、南朝を正統とし尊氏を貶める内容であり、石川も認めるように「舞文曲筆」であつた。実際、藤原耕作氏の「義貞記」論<sup>17)</sup>では、初版における足利方に対する否定的表現が、全集収録時に薄められていることが明らかにされている。

また、「附記」では本家である尊氏が分家として、分家である義貞が本家として扱われていたとある。この評価の逆転を前節で触れた南北朝正閏問題と合わせて考察したい。南北朝正閏問題の火種として知られるのが、一九一一年一月一九日の『読売新聞』の記事である。その論点のひとつには、国定教科書が正成、義貞らの「諸忠臣」と尊氏とを同等としていることに対する非難があつた。「附記」の記述は、そうした正閏問題の時期や戦中における義貞、尊氏の評価を表しているといえる。

そのような評価の形成について論じた関幸彦氏は、『ミカドの国の歴史学』<sup>18)</sup>において、近代は、「中世の尊氏を否定すること」で、「南朝」は断絶することなく、「吉野朝」として存続する論理を見出した」と述べる。そしてさらに次のように論じている。



後醍醐天皇を擁した南朝の忠臣たちは、尊氏と反比例するように評価が高まった。『歴史の組み換え』ともいふべき現象がなされたのである。その意味で、近代は中世の「南北朝の対立」という史実を否定する論理を、歴史のなかに求めることで成立したともいえる。

これを補足する史料として関氏は『贈位諸賢伝』を挙げている。それは、一九二七年に出版された、史上の人物の贈位と業績が記されている書物である。関氏は贈位の基準が「国家に対する勲功」であること、そして『贈位諸賢伝』に記載されている古代・中世贈位者のうち、南朝が七割を占めていることを踏まえ、「明治期以来の国家の論理は、中世の愛国者たちを、近代に浮上させることで、徐々にではあるが「国体」への意識を発揚した」と述べる。

近代における万世一系という「国家の論理」は、南北朝正閏問題を通じ、義貞ら「忠臣」の評価の上昇と尊氏の評価の下落に与した。そこでなされたのが「歴史の組み換え」という現象であった。そしてそれは、『義貞記』を書かざるを得ず、また、史観の恣意性を指摘したエッセイ<sup>(19)</sup>を戦中に執筆した石川のよく意識するところであったといえるだろう。

以上を踏まえて余一の歴史観を整理したい。その特徴としては、万世一系の否定という点において、戦前の老先生の歴史観と対照的であることが挙げられる。そしてそれは、石川の言説と共通点を持ち、南北朝正閏問題を含む、戦中にかけての「歴史の組み換え」に反するものであったといえる。

それはつまり、いわば「歴史の再組み換え」と呼べるものであるのではないか。なぜなら、老先生に代表される歴史観が、歴史を「組み換え」て神代からの連続性を担保することで成り立つものであったのに対して、余一の歴史観は、その連続性を断ち切る「人間」として尊氏を挙げることで、室町時代を「血のかよつた人間」が動きだした「近代のひらけはじめ」であるとし、「後世の生活にまで血がつながつてある」のだとしているからである。

そうであるならば、なぜ一九五八年に「歴史の再組み換え」というテーマが取り上げられたのだろうか。その要因の一つとしては、紀元節問題が挙げられる。それは、戦前において神武天皇即位の日として二月一日に置かれていた紀元節を、戦後、建国記念の日として復活させようとしたことに対し、歴史家や教育者などが反対したという問題である。一九五七年二月に祝日法改正案が提出され、同年五月八日には反対声明が出された。

また、一九五八年二月一日には紀元節問題懇談会、一〇日には紀元節反対集会が開催された。

この紀元節再興の提言は、神代からの連続性を象徴する神武天皇の即位の日の復活という点において、戦前の老先生の歴史観と通ずるものがあるといえる。そのような「歴史の組み換え」を受けて、余一の歴史観は「歴史の再組み換え」として対置されているといえるのではないだろうか。

### 三、〈今〉と〈むかし〉の関係性

本節では〈今〉と〈むかし〉というキーワードについて考察する。作品のタイトルにも含まれる〈今〉と〈むかし〉については、老先生、小説家、余一のそれぞれに関係がある。それらを分析し、第一、二節で論じた老先生と余一の歴史観と、〈今〉と〈むかし〉との影響関係を論じたい。

老先生における〈今〉と〈むかし〉の関係は、「今となつては遠いむかしのことだが」という言葉に表われている。それは、老先生の「今はむかし」という「アダ名」を思い出したという余一の話に、小説家が応じた際の言葉である。ここでいう「今となつては遠いむかしのことだが」とは、老先生の〈今〉とい

う時点から見れば、古代から鎌倉時代までは「遠いむかし」であったであろうことを表していると考えられる。つまり、先生の〈今〉と〈むかし〉は遠く隔てられているのである。

少し時代が下るが、大久保利謙の『日本近代史学事始め』<sup>20</sup>には、「今となつては遠いむかしのことだが」という言葉に象徴されるような状況が描かれている。そこには、当時において、現在と過去が切り離されたものとして捉えられていたことが語られている。

大正末年に大学に入った頃の歴史学のありかたは、歴史地理学会の学風みたいな実証的な古い感じのものでしたね。か吉田東伍さんとか、ああいう人たちの学風のところ、わたしはよく行きました。そこではまったく昔の話ばかり。お城の遺跡とかが研究対象で、現代の問題などはまったく出てこない。

なにより、現代の問題と関連させて歴史を見るという視点はほとんどなかった。あくまで現代と切り離された古代であり、中世であり、そして江戸時代だという考え方で、歴史というものは、近現代とは切り離された過去の世界と

いう捉え方でした。

ここから、老先生においても、〈今〉と〈むかし〉の断絶が起こっていたのではないかと推察される。

老先生の〈今〉と〈むかし〉の関係性に対し、小説家は、自身の生き方において「今はむかし」の表す意味を〈今〉すなわち〈むかし〉であるとす。つまりそれは、「今はむかし」という言葉を慣用句的ではなく、あえて文字通りに受け取ることで、〈今〉という一瞬は途端に〈むかし〉になっていくと解釈しているということである。言いかえるならば、〈今〉イコール〈むかし〉といえる。また、それをテキストに沿って説明すれば、小説家の「生きる時間」とは「逃げる今の一瞬」であるといえるだろう。

これと比較すると余一の考え方は、老先生の遠く隔たった〈今〉と〈むかし〉とは異なっているという点においては小説家と軌を一にするが、〈今〉というものの捉え方という点では差異がある。また、余一の〈今〉と〈むかし〉に対する考え方は、テキストの進行に従って変化化する。その変化は、新栗汁粉を思い出す場面、そして、終盤における小説家との会話から見出せる。

まず、テキストの冒頭で余一が、老先生の告別式に向かう最中に新栗汁粉を思い出した場面における、〈今〉と〈むかし〉との関連性を確認する。

余一は中学生のころ秋になるとよくその汁粉屋に行つた。(略) 来年の停年といふ一くぎりまへにして、四十何年のうしろのはうから、どうして新栗汁粉がこの場に突然にほひ出たのか。

——しんくりじること、か。

虚無のほひであつた。四十何年のむかしから現在までの、いや、来年までの歴史を一瞬に見とほしたやうであつたが、そこにはなにも見えないひとしかつた。といふことは、現在から新栗汁粉にまで突然刎ねかへつたといふことにもひとしいのではない。ただ、いいあんばいに、今日どこをさがしても見つかりさうもないかの実物の新栗汁粉はすでに完全にほろびたものにちがひなかつた。そして、それをいいあんばいと見るところに現在の「一瞬があつた。」

ここでは、「現在」＝〈今〉から新栗汁粉という〈むかし〉までの時間的な幅はほとんど存在しないといえる。「突然にほ

ひ出した」「突然匆ねかへつた」とあるように、〈今〉と〈むかし〉の間の「歴史」は省略されており、「なにも見えない」状態であることが窺える。つまり、これは小説家とは異なり、〈今〉と〈むかし〉の間に何もなく、重なり合っているという意味で〈今〉イコール〈むかし〉であるといえる。それに対して、テクストの終盤における小説家と電話で会話をする場面で、余一は次のように述べている。

——現在のほくにとつては、新栗汁粉からけふの紅茶までの、たつた何十年といふみじかい時間が、今といふものだ。しかし、今にはそれだけの、みじかいとはいつても、時間的な幅がある。げんに生きてゐるほくの足の下に、せめてそれくらゐの幅がなくては、ほくはてくてくあるいて室町東山といふ庫にはひつて行けない。今が「瞬にしてついむかしといふきみの達観は、せつちちすぎで、足がすべりさうだ。

余一はここで、中学生のころに食べていた「新栗汁粉」と、ロカビリーが演奏されるジャズ喫茶の「けふの紅茶」との間の時間を「今」としている。それは、新栗汁粉を思い出す場面の

ように〈今〉と〈むかし〉の間が省略されているということではなく、その間に「時間的な幅」が存在しているということである。

小説家の場合は、彼が「今が一瞬にしてついむかしといふ達観」を示したとおり、その「生きる時間」は「今の一瞬」だが、余一の場合はそれと対抗するように、室町の「歴史」に向かうには、「生きてゐるほくの足の下に」「時間的な幅」がなければならぬと述べているのである。

また、両者とも「生きる時間」や「生きてゐるほく」と述べているように、〈今〉と〈むかし〉の関係性は、人生における時間の捉え方と関連があるといえる。小説家の人生は〈今〉という一瞬間しかないといえ、彼は余一といっしょに食べに行つたという新栗汁粉を「前の世の錯覚」とし、それは「われわれの生理的時間」とは無関係であると述べる。反対に余一は、「新栗汁粉」から「けふの紅茶」までの「何十年」という個人の「歴史」を、〈今〉と〈むかし〉の「幅」(＝「今」)として把握している。そしてそれは、冒頭における〈今〉と〈むかし〉の間に「なにも見えない」というような時間の捉え方から変化したものであるといえるだろう。

以上のような、余一における〈今〉と〈むかし〉との関係性

の変化の間には、ロカビリー体験がある。余一がロカビリーを鑑賞する場面は、次のように表されている。

テープが投げつけられ、テープはまつすぐに飛んで、ギターの首をぎゅつと絞めた。うすい紙のテープは針金のやうにぴんと張つたままうごかない。力の関係が定着された場合はまさにそのうすい紙の上であつた。余一は手ぶらで立つてはゐるが、自分の手の力もまたそこにはたらいで、テープのはしをにぎることに参加してゐると感じた。

このロカビリー体験の後、余一は、先に引用した「新粟汁粉からけふの紅茶まで」が「今」であり、そこには「時間的な幅がある」という言葉に対する、小説家の「その気の長い新説を支へるやうな史料でもひろつて来たのか」というセリフを聞かされる。そして余一は、それに「テープはつづくものだからね」と答えている。

この会話において余一は、ロカビリーでの経験を踏まえ、紙テープを「今」＝「時間的な幅」の比喩としていえるだろう。その理由として、一つには「新説を支へる史料」としてロカビリーで見たテープの話を持ち出していること。そして

う一つには、人生における時間も、テープも「つづくもの」として捉えられるであろうことが挙げられる。

さらに、先のセリフに続いて、余一は次のように述べる。

——さうさ。ギターの首を絞めるやつだよ。ほくの観測では、じつに三分といふ長い時間にわたつて、あのうすつぺらな紙はぴんと張りつめることに堪へたね。そこにはたらく力がつづくかぎりには、切れないね。

——なにをいつてるんだ。

——一瞬では切れないといつてゐる。

まず、「三分という長い時間」とは、「新粟汁粉からけふの紅茶までの、たつた何十年といふみじかい時間」に対応する逆説的な物言いであると考えられる。

そして、余一は、「今」という時間の幅に喩えられたテープを「一瞬では切れない」とする。これは、「今が一瞬」であるという小説家の言に対抗する言葉であると考えられる。つまり、ここで余一は、テープを「力」の働くかぎり「つづくもの」であるとし、「今」という時間の幅すなわち個人の歴史の喩えとすることで、小説家の生き方への対抗原理を打ち出しているの

ではないだろうか。

それは、個人における〈今〉と〈むかし〉を確かめなおすことで、そこに見出される「今」という地歩を固め、「歴史」へと向かっていくという立場の表明であるといえる。このような立場は、小説家の「今が一瞬にしてついむかし」という達観ではなく、まして老先生の「今となつては遠いむかしのことだが」という態度とも異なる。前者は、「歴史」を対象化する「今」が存在せず、後者は、「今」と「歴史」が断絶している。両者とも「今」と「歴史」という対照的な関係を結ぶことができていないのである。

繰り返しになるが、余一は「今」＝「時間的な幅」を、「力の関係が定着する場」であるテープとして喻えた。それはまた、個人の歴史の喻えでもあった。この個人の歴史における〈今〉と〈むかし〉を、現在と過去との関係性という意味において、「今」と「歴史」に置き換えるならば、そこが「力の関係が定着する場」になるといえるのではないだろうか。その「場」は、具体的にいうならば、〈今〉と〈むかし〉においては「紅茶」と「新粟汁粉」の間の「幅」であり、「今」と「歴史」においては、余一の人生と室町時代の間の「幅」であるといえるだろう。この置き換えは、余一が「今」を認識することで、「室町東山とい

ふ庫」つまり「歴史」に入っていけると述べていることから可能なのではないか。

であるならば、余一は「今」と「歴史」の間に「力の関係が定着」しうることを意識していたといえるのではないだろうか。そしてそれは、広義の歴史というものを記述する際に、重要な視点であっただろう。なぜなら、歴史は「今」を生きる歴史家によって記述されるものであり、その歴史家と歴史との間の力学を認識することこそ、老先生に代表される歴史観や彼の〈今〉と〈むかし〉の断絶を乗り越える方法だといえるからである。

#### おわりに

本論では、老先生、余一の歴史観がどのようなものであったかを分析し、また、両者に小説家を加えた三人の〈今〉と〈むかし〉の関係性と、歴史観との関わりを論じた。

第一節では、老先生の歴史観を分析し、彼が「応用史観」という「歴史の組み換え」を行っていたであろうことを指摘した。そして、第二節で論じた、老先生に対する余一の歴史観は、そうした「組み換えられた歴史」に対する〈再組み換え〉であった。それは、一見、単なる戦後の揺り戻しであるように見えるかも

しれないが、ここで語られている歴史観は戦中の反動というだけでは足りないだろう。第三節における「今」という「歴史」に相對する意識も同様であるといえる。それらは、石川の言説とも通ずるといふ点も含め、石川の他作品にも接続され得るのではないか。

例えば、一九六〇年に発表された「喜寿童女」では、オルタナティブな歴史、つまり〈稗史〉に着目することで、歴史の再編がなされている。また、歴史を意識する「今」における語り手により、徳川時代の裏面史があぶり出されるという構造を持つという点も「喜寿童女」の特徴である<sup>(2)</sup>。

また、一九六九年の「天馬賦」では、大岳という老人の生きる現在で起こる「全共闘」と、自らの過去の運動が重ねられており、自らの個人の歴史を書く試みとして自伝の執筆をしている様子が描かれている。これは、「今」というものの再認識の試みであるということから、「今とむかし」と関連するといえるだろう。

このように、「今とむかし」におけるテーマが、後の歴史を取り扱った作品の萌芽になっているという点において、本作はそれらの作品群の中で重要な位置を占めているといえるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 青柳達雄「『修羅』の構造」『石川淳の文学』・笠間書院・一九七八年八月三一日
- (2) 井澤義雄「修羅」『石川淳の小説』・岩波書店・一九九二年五月一九日
- (3) 安藤始「第十三章 魂・伝説・歴史——『八幡縁起』、『修羅』」『石川淳論』・桜楓社・一九八七年五月六日
- (4) 藤原耕作「石川淳「八幡縁起」考」『福岡女子短大紀要』第四八号・一九九四年二月一〇日
- (5) 畦地芳弘「『今はむかし』における現在」『石川淳後期作品研究』和泉書院・二〇〇九年一〇月一日
- (6) 注1に同じ
- (7) 坂本太郎「日本の修史と史学」・至文堂・一九五八年（引用は二〇二〇年八月六日刊・講談社による）
- (8) 『官報』5288号・一九〇一年三月五日
- (9) 田中史郎『社会科の史的探求』・西日本法規出版・一九九九年一月二三日
- (10) 坪井九馬三「史学に就て」『史学雑誌』・一九九四年一月五日
- (11) 廣木尚「南北朝正閏問題と歴史学の展開」『歴史評論』

七四〇号・二〇一一年二月一日

(12) 注9に同じ

(13) 注11に同じ

(14) 注9に同じ

(15) 石川淳「雑談」『近代文学』第四卷第二号・一九四九年二月一日（引用は『石川淳全集』第一四卷・一九九〇年

四月三〇日刊・筑摩書房による）

(16) 石川淳「附記」『石川淳全集』第八卷（十卷本全集）・筑摩書房・一九六二年（引用は『石川淳全集』第一七卷・

一九九〇年一月三〇日刊・筑摩書房による）

(17) 藤原耕作「『義貞記』論」『国語国文』第八五卷第六号・

二〇一六年六月二五日 藤原氏は、『義貞記』を「時代のこ  
とば」や「時代のモラル」との緊張関係から戦時下の石川淳  
文学を見たとき、その最も後退した地点を示して」いる作品  
であるとする。

(18) 岡幸彦『ミカドの国の歴史学』・新人物往来社・一九九四

年三月（引用は『国史』の誕生」に改題・二〇一四年七月  
一〇日刊・講談社による）

(19) 石川淳の戦中の歴史批判エッセイとしては、「歴史と文  
学」（一九四一年）、「散文小史」（一九四二年）、「歴史小説に

ついて」（一九四四年）などが挙げられる。

(20) 大久保利謙『日本近代史学事始め』・岩波書店・一九九六  
年一月二二日

(21) 「喜寿童女」については、拙稿「喜寿童女」論——（碑  
史」との関係めぐって——」（『阪神近代文学』二〇二〇年  
五月）で論じた。

（よしだ たくや／本学大学院生）